



### やさしく、判りやすい日本語を

わか にほんご

福原 義春  
ふくはら よしはる

70年以上も日本人でありながら、このごろまわりで話している日本語が判らなくなった。耳が遠くなったのではと疑われることもあるが、そればかりではなさそう。

考えて見れば、ぼくが子供のころには50歳を過ぎた人はみんな老人に見えた。それが今や平均寿命80歳前になってしまったのだから、生きている時間が格段に長くなってしまった。だから若い人たちとぼくの世代にはもう60年以上の差があり、話される言葉もその間にどんどん変わってしまったのだ。

そのひとつは話す速度だ。ぼくたちの世代は毎夜のテレビのバラエティ番組に出るタレントの話す早さととてもついていけない。ニュース番組でさえ、アナウンサーの言葉をテロップで活字化しているではないか。しかもそれが役に立つことが多いのだ。

また話し言葉の抑揚やアクセントが変わって来てしまったこともあって、これも言葉を理解するのに困難

を覚える原因のひとつだ。

おぼ げんいん

もうひとつは米国流に何でも省略してしまうことだ。

べいこくりゅう なん しょうりやく

ぼくの育ち盛りのころは進駐米軍からPXとかCIEとかFENとかRTOだとか教えられた。今だってEUとかNPOとかIT、CEOとか、頭文字によるものと難しい省略語も氾濫している。そのスタイルを日本語でやるものだから、デパ地下とか、ファミレス、ドタキャン、ジコチュー…まるで訳のわからない略語までが飛び交っている。

コメディアンを使う感嘆詞に至ってはもっと流行りすたりが激しい。遠い昔の「アジャパー」「オヨヨ」ですらぼくたちには使えないし、大体今はやりの言葉はニュアンスすら判らない。

日本語を学ぶ外国の方々をおどかすつもりは毛頭ない。だけれども生活が光の速度で変わって行く時代には、日本語の話し言葉も書き言葉もおそろべき早さで変わって行くことを伝えたかった。しかし、やさしくて判りやすい日本語はいつの世にも不変の筈だ。それを学んで欲しい。

(資生堂名誉会長)  
しせいどうめいよかいちょう